

令和4年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立日高中学校 教諭 横倉 由佳

- 1 派遣期日 令和4年 11月 18日（金）
- 2 派遣先 令和4年度 第65回 全関東地区中学校国語教育研究協議会 千葉大会
令和4年度 第56回 千葉県教育研究会国語教育研究協議会 千葉大会
所在地 〒261-0013 住所 千葉市美浜区打 3-12-1 千葉市立打瀬中学校

3 研修内容

研究主題	社会生活に役立つ国語科教育の創造
研修内容	講演 文部科学省 初等中等局教科調査官 鈴木 太郎 氏 授業研究会 中学校3 読むこと1「文学的文章」 教諭 高橋 暖 先生（千葉市立 草野中学校） スピニアウト作品を書こう～「人物像」と「背景」を手立てとして登場人物の内面を書く～ 研究発表会 中学校3 読むこと1「文学的文章」 教諭 沼野 美智子 先生（日立市立台原中学校） 深い学びのためのICTを活用した指導の工夫 ～3年国語科「百科事典少女」を通して～ 中学校総括・講話 千葉大学教育学部教授 森田 真吾 氏 「今後における社会生活の進展を見据えた国語教育のあり方について」

【授業研究会】

『国語2』（光村図書）の「盆土産」（出典：『冬の雁』）を取り上げ、一人称視点で「一家の弟」から見て書かれている作品を、モノローグの形にして「弟」「父親」「祖母」「姉」の中から選択して書くという活動だった。ICTの活用として、前時までに映像資料を見たり、GoogleJamboardやGoogleFoamsを使って情報を共有したりして、本時でもそれらをスプレッドシートにして配布することで学級全体が共有できるよう配慮されていた。生徒はワークシートとタブレットを併用しながら、モノローグを書くことができていた。また、モノローグは高校国語の「文学国語」の中の「戯曲」を意識して設定したということから、教室の周囲には高校の「文学国語」の教科書や教材に関連した資料が多数用意されていた。

登場人物の「人物像」を十分に理解し、その上で本文に書かれていない登場人物たちの内面を書くという活動は、「スピニアウト作品」という派生作品として、本編作品に対する考え方や感じ方を深化させる手立てになると考え、言語活動に用いたとのことであった。生徒たちは、前時までの時代背景や生活環境を理解した上で、創作活動に取り組んでいた。個人差はあったが、スプレッドシートを見ながら、方言や青森の出稼ぎといった当時の社会状況を踏まえておおむねモノローグを書けている様子であった。

なお研究協議の中で、この活動は「書く」作業であり、「読む」指導ではないのではないかという指摘があった。指導助言者の秀明大学教授、飯田良氏によれば、十分に登場人物を理解し、叙述を捉えた上でスピニアウト作品に表現するという活動は、「読む」ことを狙いとしていると言えるという助言があった。

【研究発表会】

『新しい国語3』（東京書籍）の「百科事典少女」（出典：「最果てアーケード」）を通して、批評的読みの学習を行ったという実践発表だった。特に ICT を用いた効果的な活動を設定することで、「深い学び」の実現を目指しており、1 つ目に考えの共有の手段としてスカイメニューアプリケーションや Teams を活用した。また 2 つ目に、読みを深める手段として Mintimeter やスカイメニューアプリケーションの「発表ノート」を使って、話し合い活動とは異なる文字で確認しながら読みを深めることができたとのことであった。特に成果として、自分の考えになかった言葉に着目することで、「なるほど、こんな考えもあるんだ。」という新たな視点につながり、読みが深まったという点が挙げられていた。また、ICT の活用により、活動内容が精選され、活動時間の均一化につながったことで、全体での考えの共有が瞬時に可能になったという利点も挙げられていた。

千葉大学教育学部、森田真吾氏の講話「今後における社会生活の進展を見据えた国語教育のあり方」では、「全国学力・学習状況調査」の調査結果についての分析が紹介されていた。中学国語の課題の一つである「根拠を明確にするために必要な情報を資料から引用して書くこと」「具体的な助言があればスピーチの表現を工夫することはできているが、話し方の工夫について自分で考えることに課題が見られる。」という点は本校でも同じ傾向がある。特に引用に関しては、インターネットの普及に伴い、これからの社会生活を生きる生徒にとっては身につけておくべき力であると考ええる。引用箇所をそのまま抜き出し、かぎかっこ（「 」）でくくることが、出典を明示すること等は指導すれば身につけることは容易である。しかし、考えを支える根拠として引用をいかにすべきか、その言葉が引用なのか自分の考えなのか混同してしまうなどの課題が残っている。森田氏の講話を拝聴し、今後も社会生活に直結した引用の力を身に付けられるよう、教材研究が必要であると痛感した。

4 感想

「社会生活に役立つ国語科教育の創造」という研究主題は、国語の授業を進めていく中で、自分がずっと抱えてきた課題である。国語の授業及び学校生活の中で、これからの社会生活におけるさまざまな場面において、自分の考えや思いを着実に発信していくために、どのような手立てがあるのかを学びたいと考えている。そしてそれは生徒にとっても、何のために学ぶのか、どう学んでいくべきかという意識につながるものだと考える。今回の研究協議会を通して、具体的な取組や実践をしっかりと学びたいと思い、本大会への参加を選定した。

コロナ禍になってから授業を公開することが難しくなったが、今回はあえて公開することだったので、生徒の活動をしっかりと見ることもできた。また、分科会を選ぶ際、特に文学作品を「読む」活動は、生徒たちの社会生活にどう活かすべきか、さらに「読む」活動の中に ICT をどのように取り入れていくべきか悩んでいたのも、文学作品を読む領域の分科会を選択した。

文学と ICT は一見相容れないもののようには捉われがちであるが、今回の研修に参加して、ICT を上手に利用することで、文学作品は奥行きのある面白さを見せるのだと思った。高橋教諭も「本単元で設定した言語活動を通して、文学の味わい方を知るきっかけとし、今後の社会生活において文学に親しむ生徒を育ていきたい。」とおっしゃっていたが、こうした取組は今後の生徒たちの社会生活につながっていく国語の活動と言える。基調提案の中でも「教材を教える」「教材で教える」ではなく、「使える」思考のレベルを目指す、それは『学ぶ意義や教科の本質的な楽しさに触れられる本物の（真正な）学習を創造することである。』と提案されていた。そう考えるなら、文学作品を通して ICT を活用しながら、読む楽しさを味わうことが「使える」思考につながっていくものと考ええる。

そのためには「付けたい力」を明確にし、正しく評価することを念頭に置いて教材研究をしなくてはならない。今回の研究発表会の中では、ICT の利点を述べる一方で、評価の難しさが課題として挙げられていた。異なる意見や考えを「間違い」と捉えずに受け入れることや、成果をどのように残していくかなどであった。自分ごととして、今後もさらに評価に関しての研修に努めていきたいと思った。